

【一般講演1】 第4席

「東洞流古方の経絡無用論と『宮門流針書』」

京都 平田尚子

しばしば指摘されるように、江戸中期に台頭した古方派は、湯液に対する統一した体系をもつ訳ではない。したがって、古方派内部の鍼灸に対する認識の異同が存在することは十分に予測できるのだが、いまだ判然としない点が多い。名古屋玄医・香川修庵・後藤艮山等が経絡経穴学に根ざした灸法を重視したのに対し、杏林東洞を筆頭とする古方派は「無一不可灸之穴、無一不可刺之経。」と経絡無用の論を喝破し、万病一毒説に基づき「病四肢百骸者、皆毒也。毒必根於腹…」 「…毒之所在、灸之、刺之、是已。」とした。

宮門流は、このような東洞流古方の万病一毒説を踏襲した、現在確認できる唯一の鍼灸流派である。宮門とはすなわち臍の別称で、宮門を中心に腹を小天地と見立て、腹部における毒の所在を診断し、三寸の鍼をもって腹の毒を攻めて療治するのである。

一方、腹部における刺鍼については室町末期に興った夢分流が有名であり、また江戸前期には別流の高津敬節が『鍼灸逆回集』中で、矢野白成が『鍼治枢要』中で腹診と刺鍼の関係を詳論している。つまり、日本には腹部刺鍼法の技術および理論に関して若干の蓄積があり、宮門流の技術的側面においては前記諸流の影響が考えられる。

したがって今回は、日本における腹部刺鍼技術の変遷を踏まえながら、『宮門流針書』を基準に古方派内部の鍼灸理論の差異を考察したい。